奈良教育大学紀要　第57巻　第１号（人文・社会）平成20年
Bull. Nara Univ. Educ., Vol. 57, No.1 (Cult. & Soc.), 2008

地域学習としての「世界遺産教育」

中 澤 静 男*・田 渕 五十生
奈良教育大学社会科教育講座
（平成20年５月７日受理）

Educational Practices of World Heritage Education as the Form of Regional Studies

Shizuo NAKAZAWA* and Isoo TABUCHI
(*Department of Social Studies Education, Nara University of Education, Nara 630-8528, Japan*)
(Received May 7, 2008)

Abstract

All the 5th grade students of the primary schools in Nara city came to have the classes of making field work to the world heritage sites in Nara city

In this paper authors made a report on the educational practice about World Heritage Education which were pursued by the teachers of Nara city collaborated with Nara University of Education.

The contents of this paper are consisted of 5 points as followers:

Firstly Mr. Tabuchi who is one of authors described why he came to realize the educational meaning of World Heritage Education through his experiences to be involved in UNESCO activities.

Secondly how he and Mr. Nakazawa established the Special Committee to promote World Heritage Education. Mr. Nakazawa is another author and supervisor at Nara city board of education.

Thirdly Mr.Nakazawa introduced the activities of the Special Committee and how teaches made practice collaborating with Nara National Museum and "Suzaku" which is the volunteer tourist guide group.

Fourthly authors made a report of the workshop to exchange mutual educational practice to improve their educational methods and ideas, and also they analyzed practical reports on the World Heritage Education.

Finally they reflected their one year activities and analyzed the meaning of World Heritage Education from the pedagogical viewpoint.

Key Words： World Heritage Education, Associated School Projects for UNESCO, Education for Sustainable Development

キーワード： 世界遺産教育、ユネスコ協同学校（ユネスコ・スクール）、ＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）

１．はじめに

日本では「世界遺産教育」は未だ市民権を得ていない。けれども、ユネスコはユネスコ・スクール・ネットワーク（Associated School Projects　Network 以下ＡＳＰネット）を通して、世界遺産の価値を内面化する教育を

*奈良市教育委員会学校教育課

世界の教育現場に向かって提唱している。1994年の提唱以来、十数年が経過したが、そのような動向は日本の教育現場には伝わらず、世界遺産教育への取り組みはほとんど行われていない。その最大の理由は、日本のユネスコ・スクールへの加盟校が極めて少ないからである。世界の加盟校は約7900校、ちなみに日本は現在24校にとどまり、しかも2004年になってからの加盟で、ユネスコの事務総長を選出している国として、教育実践を通してのユネスコへの貢献は不十分であると言わざるを得ない。ちなみに隣国の韓国では100校を遥かに超えている。

共同筆者の一人である田渕は、2005年８月、北京で行われた東アジア５カ国の「第３回世界遺産教育ワークショップ」にユネスコ国内委員会から日本代表として派遣された。奈良の世界遺産をシルクロードの世界遺産に結び付ける実践を大学で行っていたので、その実践報告を依頼されたのである。

そのワークショップに参加して実践報告を行った内容が評価され、ユネスコのアジア・太平洋地域（バンコク・オフィス）の世界遺産教育のリソースパーソンに任じられた。そして、翌06年の５月、バンコク・オフィスで、ソウルで開催される「第４回世界遺産教育ワークショップ」の立案にかかわり、06年11月にファシリテイターの一員として､田渕がワークショップを推進した。そのような体験を通して、韓国や中国やモンゴル等でＡＳＰネットを通して世界遺産教育が活発に展開されている実態に触れ、日本の世界遺産教育の遅れとＡＳＰ活動の不活発さを認識させられた。

そこで、田渕は、世界遺産教育を日本の教育現場で推進するために地元の奈良市教育委員会に働きかけて、世界遺産教育を実践する態勢を構築したいと考えた。

その窓口になったのが共同筆者の中澤である｡中澤は、奈良市教育委員会学校教育課の指導主事で、従来から行われていた奈良市教育委員会の世界遺産学習に、ユネスコが提起するＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）の精神を吹き込みたいと考え、奈良市教育委員会への組織対応を働きかけた。

そして、2007年５月に、奈良市教育委員会内に「新しい世界遺産学習構築のための検討委員会」（以下、検討委員会）が設置されて、田渕が委員長に、奈良国立博物館の西山厚教育室長（現学芸部長）が副委員長に就任した。そこで、奈良市立小学校５年生の主に「総合的な学習の時間」を使用して世界遺産教育に取り組むこと、また、中学校でも事情の許す範囲で取組を行なっていくことが申し合わされた。本報告は、奈良教育大学と奈良市教育委員会、奈良国立博物館がどのように連携することで、世界遺産学習が市内全小・中学校において実施されるようにいたったのか、またそこでは具体的にどのような実践が展開されたのを明らかにするものである。

2008年２月23日に、世界遺産学習における先進的な取組を行なっている先生方が実践を持ち寄り、実践を交流するとともに、その学習モデルを発信するための「実践研究会」が、奈良市教育委員会、日本国際理解教育学会、奈良教育大学、奈良国立博物館の４者の共催により、奈良教育大学を会場に開催された。奈良県教育委員会、日本ユネスコ協会連盟、ユネスコアジア・太平洋文化センターも後援団体として名を連ね、200名以上の参加者のもと、実践を対象化しての議論が深められた。

小論はその１年間の報告で、次の３点から構成されている。まず、ユネスコが提起するＥＳＤの概念を奈良市世界遺産学習に取り入れ、研究を推進していくための研究推進組織をどう立ち上げたかについての報告する。奈良市において、新しい学習概念として、ほとんど知られていなかったＥＳＤの概念を、どのように紹介し、奈良市全体で取り組むこととなったのかを、研究推進母体でとなった｢新しい世界遺産学習構築のための検討委員会｣の内容を中心に紹介したい。次に研究成果を市立小・中学校の教職員に伝え、世界遺産学習の実践へとつなげるために、どのような方法で啓発しようとしているのかについて詳細に記述した。奈良市の全ての小中学校の教職員が、ＥＳＤや世界遺産学習の意義や方法を正しく理解しなければ、実践にはつながらない。そのためにどのような教職員研修を行ったかについても報告している。最後に世界遺産学習の実践を交流し、討議することで、実践の中から理論を析出し、発信することを目的とした実践研究会について報告するとともに、その教育学的意味を考察した。

2. 研究推進組織について

奈良市では1998年に「古都奈良の文化財」として、東大寺、興福寺、春日大社、春日山原始林、元興寺、薬師寺、唐招提寺、平城宮跡の８資産群が世界文化遺産リストに登録されたのを契機として、2000年には世界遺産学習資料『世界遺産のあるまち奈良』を刊行し、市立小学校５年生に配布してきた。また2001年からは、５年生を対象に世界遺産に登録されたサイトでのフィールドワークを中心とした世界遺産学習を実施してきた。

しかしこれまでの世界遺産学習は、一種の「遠足」であったと言っても過言ではない。世界遺産をフィールドワークすることで何を子ども達に学習させるかが明確にされないまま、世界遺産に関する知識獲得が中心に展開されていた。そこで、世界遺産からＥＳＤに発展できる学習への再編を意図し、2007年度に「新しい世界遺産学習構築のための検討委員会」（以下、検討委員会）を設置し、研究を進めてきた。

2．1．新しい世界遺産学習構築のための検討委員会

奈良市では、世界遺産等の文化財に関わって、社寺はもとより、教育機関だけでなく、奈良文化財研究所や博物館などの研究施設、ＮＰＯなどの民間団体等の多様な機関において、独自の取組が行なわれてきた。それら諸団体の横のつながりを形成し、世界遺産を核とした人と人、文化財と文化財、そして人と文化財のつながりを築くとともに、文化財に対する多様な見方・考え方を世界遺産学習に反映させるために、共同執筆者の田渕を委員長に、奈良国立博物館の西山を副委員長とし、大学・学校・ＮＰＯ・社寺・研究所・小中学校・教育委員会の代表者による検討委員会が組織された。

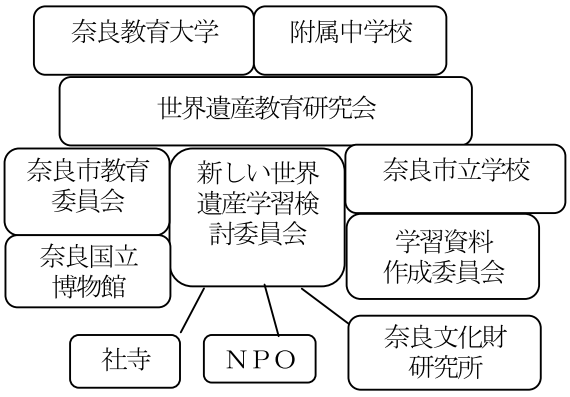

図1　検討委員会の組織図

2．2．検討委員会での研究の概要

（1）第１回検討委員会

５月25日に第１回の検討委員会を開催し、昨年度までの市立小学校５年生を対象に実施してきた奈良市世界遺産学習を次の２点から見直しを行った。第１に世界遺産学習において、各小学校が行っていた取組の実際について、第２に世界遺産学習資料『世界遺産のあるまち奈良』について検討した。

第1の各小学校の取組についてであるが、2006年度の取組について吟味し、成果と課題を明らかにした。その成果として３点挙げることができる。一つは、世界遺産に親しむ機会を保障したことである。奈良市に住みながら世界遺産に一度もふれたことがない子どももいた。小学校５年生全員を対象とした現地学習を行うことで、奈良市のすべての子どもが、小学校時代に一度は世界遺産にふれる機会になっている。

二つは、ＮＰＯとの連携が確立したことである。2002年度の世界遺産学習から、ＮＰＯ法人「なら観光ボランティアガイドの会」と連携している。子ども８人につき1名のボランティアガイドが世界遺産等の文化財について、丁寧に説明するシステムが確立した。40人の子どもを一人の教員が引率するのとは違い、小グループによる現地見学を行うことで、子ども達は説明を集中して聞くことができている。

三つは、異年齢交流である。ボランティアガイドの多くは、高齢者である。核家族化等で普段、高齢者と接する機会の少ない子どもにとって、ボランティアガイドの方とのふれあいは貴重な異世代交流の機会になっている。ボランティアガイドからも、子どもと身近に接することができると好評である。

一方、課題としては、次の４つが明確になってきた。第１に現地学習に偏った取組であり、第２に学校の主体性の欠如であり、第３が知識偏重の学習内容、第４に系統性の欠如の問題である。

第１の現地学習への偏りであるが、次の表は2006年度の世界遺産学習における各校の取組を表したものである。（奈良市立小学校は48校である）

表1　2006年度奈良市世界遺産学習での取組

事前学習	現地見学	事後学習	校数
○	○	○	8
○	○		8
	○	○	2
	○		30

充実した現地見学にするためには、事前学習において、見学内容に対する関心を高め、問題意識を持たせるなど、見学の視点を明確化しておく必要がある。また、学習を意味あるものとし、その後の子どもの見方・考え方にも反映するためには、見学後の振り返りが重要である。しかし、当日の現地見学だけの学習に終わってしまっている学校が多い現状が指摘された。

第２に世界遺産学習における学校の主体性である。同じく2006年度の取組において、観光客へのインタビュー調査や、「奈良の鹿愛護会」への聞き取り調査など、学校独自の学習活動を行った学校はわずかに６校に過ぎず、他の学校においては、ボランティアガイドにまかせっきりになっていた状況もあった。

第３に学習内容の偏りについてであるが、ボランティアガイドによる世界遺産等の文化財についての説明を聞くだけの学習に終始していた。そのため、知識の習得が学習の中心になり、考えたり感じたり、自分の生活に生かしたりできる学習にはなっていなかった。

第４に系統性の欠如についてであるが、小学校５年生時だけの単発的な取組であったため、子どもの世界遺産等の文化財に対する見方や考え方を十分に育成するまでには至っていなかった。今後は、学習の系統性を意識し、他の学年での取組についても検討する必要があると確認された。

以上のように、2006年度までの世界遺産学習の成果と課題を明らかにし、これからの世界遺産学習の方向性を探っていくこととなった。

次に既存の世界遺産学習資料『世界遺産のあるまち奈良[1]』についての検討である。本学習資料は、世界遺産条約についての概説と、「古都奈良の文化財」を形成する８つの資産それぞれを、豊富な写真資料を使用して説明した全27ページの冊子である。

これについては、西山副委員長から、奈良の世界遺産の単なるガイドブックであり、奈良の子ども達に、必ず伝えなければならない「本当の奈良のよさ」が書かれておらず、「熱意が感じられない」と、全面改訂の必要性を指摘された。

そこで奈良市教育委員会では、「テキスト作成委員会」を設け、検討委員会の指導を受けながら新しい学習資料の作成に取りかかることになった。なお、テキスト作成委員会委員長には田渕が、また副委員長には奈良教育大学の森本が就任し、西山の指導を受け、市立小中学校教員によるテキスト作成に取り組んだ。

（２）第２回検討委員会

６月20日に開催した検討委員会では、次の３点について協議を行った。第1に奈良市世界遺産学習の方向性であり、第２に実施学年と目標であり、第３に奈良の子どもに伝えたい「本当の奈良のよさ」についてである。

第１の方向性であるが、田渕がユネスコが提起する世界遺産教育についての紹介をするとともに、漠然とした「世界遺産教育」を、

ア．　世界遺産についての教育
　Education about World Heritage
イ．　世界遺産のための教育
　Education for World Heritage
ウ．　世界遺産を通しての教育
　Education through World Heritage

の３つにサブカテゴライズした[2]。そのことにより、世界遺産学習の概念が明確になり、世界遺産を教材化することで、人権教育、平和教育、環境教育、国際理解教育との連携を図ることが可能になることが確かめられた。そして「世界遺産からＥＳＤへ」という方向性、さらに、子どもの学習意欲を向上させ、学び続ける原動力となるのは、「本当にいいもの・奈良のよさ」に対する感動であると考え、世界遺産学習の概念を策定した。その趣旨を図式化したのが、以下の概念図である。

さらに、世界遺産学習を通して育てたい子ども像を想定し、「人が好き、まちが好き、奈良大好き世界遺産学習」というスローガンを定めるとともに、世界遺産学習の目標を次のように決定した。

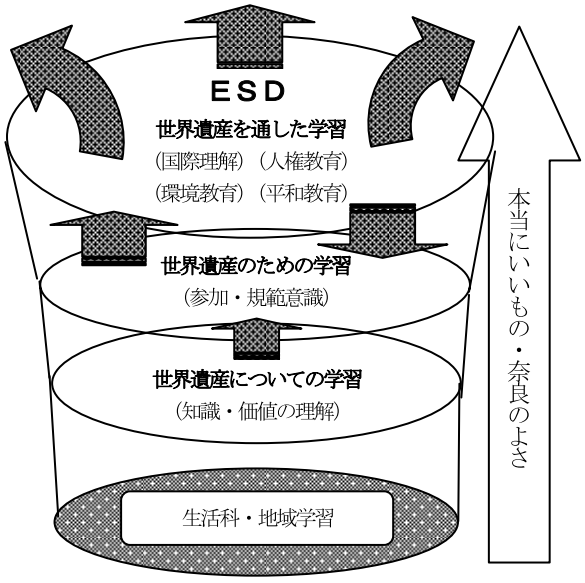

図2　奈良らしい世界遺産学習概念図

【世界遺産学習の目標】

・奈良のよさを深く理解し、奈良に愛着を感じ、奈良を誇りに思う。
・文化遺産の創造や継承、またその保護、文化遺産を取り巻く自然環境の維持に、長い年代を通じて取り組んできた人々の思いや努力を共感的に理解し、文化遺産や自然遺産を尊重する。
・空間的また歴史的に奈良の文化財や自分の生活を捉えなおし、国際理解や環境、平和等の現代的な諸課題について意欲的に学ぶ。

以上のような、世界遺産を切り口として、ＥＳＤに発展する学習を行い、世界遺産学習の目標に示された子どもの育成を図るためには、継続的な取組が求められる。そこで、世界遺産学習の実施学年についての協議を行った。

第２の実施学年についてであるが、郷土奈良を愛し、持続可能な社会を構築しようとする態度を育成するためには、これまでの小学校５年生のみの学習に終わらせることなく、世界遺産を切り口としたＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）を継続的に行なっていく必要がある。そこで、小学３・４年生の社会科における地域学習で培った学習スキルを活用しながら、小学校５年生から中学３年生において、学校の実情に即して年間10～15時間の範囲で世界遺産学習を行うこととし、目標を次のように策定した。

【小学校５年生の目標】

「古都奈良の文化財や国立奈良博物館の見学、ボランティアガイドの方々とのふれあいを通して、奈良のよさ

を理解し、文化財を尊重する態度を養う。また、問題解決型の学習活動を通して、国際理解や環境、平和等に対する関心を高める。」

【小学校６年生の目標】

「社会科の歴史学習との関連から、古都奈良の文化財を歴史的にとらえなおし、文化遺産の創造や継承、文化遺産を取り巻く自然環境の維持に、長い年代を通じて取り組んできた人々の思いや努力を共感的に理解し、文化遺産や自然遺産を尊重する態度を養う。」

【中学生の目標】

「古都奈良の文化財を切り口とした問題解決型の学習活動を通して、国際理解や環境、平和等の現代的な諸課題について意欲的に学び、自らの生活を見つめ直し、地球市民としての資質を養う。」

主に「総合的な学習の時間」での取組となると思われるが、社会科や理科はもちろん、古典との関わりから国語科や書写での取組や、雅楽を取り上げることによる音楽科での取組など、今後、実践を通した教材開発を促進していきたい。

第３の奈良の子どもに伝えたい「本当の奈良のよさ」については、３章の世界遺産学習資料の概要において詳述する。

（３）第３・４回検討委員会

12月25日に開催した第３回検討委員会、及び３月27日に開催した第４回検討委員会で協議されたのは、次の３つである。第１はテキスト作成委員会で作成している世界遺産学習資料の検討である。その詳細は次章で述べる。

第２は2007年度の教職員研修の報告である。第１回検討委員会において、指導する教員の文化財に対する造詣の深さ、関心の高さが、世界遺産学習における子どもの学習意欲や態度に大きな影響を与えているとの指摘を受けた。そこで、世界遺産学習にかかわる教職員研修を前年度は３回であったが、2007年度は以下のように７回開催し、延べ406名が受講した。

・国立博物館で学ぶー奈良を知り、奈良を語るためにー
　講師：奈良国立博物館教育室長　西山厚
・世界遺産に学ぶ（１）世界遺産の教材化
　講師：奈良教育大学教授　淡野明彦
・世界遺産に学ぶ（２）奈良町の価値を探る
　講師：奈良市教委指導主事　中澤静男
・世界遺産に学ぶ（３）平城宮跡と古代瓦の拓本作り
　講師：平城宮跡サポートネットワーク
・世界遺産を学ぶ（４）春日大社
　講師：大阪府文化財センター理事長　水野正好
・社会科教育研修講座（２）奈良の鹿と鹿垣
　講師：奈良教育大学准教授　渡辺伸一
・人権スポット研修　興福寺周辺
　講師：NPO子どもの人権総合研究所理事長　大寺和男

教職員研修は充実してきているが、参加する教員の興味を高める段階に止まり、授業改善には至っていない。今後は、世界遺産の教材化やプレゼン作成指導などの研修が求められている。

第３の検討委員会での協議は２月23日に開催した第１回世界遺産実践研究会についてであり、詳細は４章で述べる。

以上のように、2007年度は４回の検討委員会を開催し、協議を重ねてきた。そこでの収穫は、それまで個別に活動していた関係機関や団体が、検討委員どうしの人と人とのつながりができ、連携して活動し始めたことである。「奈良の子どもたちに奈良のよさを知ってもらいたい」、「奈良らしい教育を創造していきたい」という共通の思いが、毎回、熱のこもった協議をつくっていき、世界遺産学習構築における当事者意識を醸成していくこととなった。例えば、奈良国立博物館による教職員研修への協力や東大寺による姉妹校の修学旅行生の案内、観光ボランティアガイドによる中学生への写生会指導、また検討委員会による東大寺修二会見学など、多方面での活動が生まれてきた。

３．研究成果の啓発について

奈良に住む子ども達が奈良のことが好きになり、地域社会の持続的な発展のために、国際理解や環境、平和、人権等に対する関心を高めるためには、世界遺産学習を継続的、系統的な取組みにする必要がある。また、教職員の新たな教材開発や授業実践への意欲を高めるために、新しい学習資料、及び啓発用リーフレットの作成に取り組んだ。

３．１．新しい世界遺産学習資料の作成

新しい世界遺産学習資料は、奈良教育大学の田渕、森本、及び奈良国立博物館の西山の指導の下、社会科・環境教育・人権教育において先進的な実践を行っている市立小・中学校教員12名で委員会を組織し、「新しい世界遺産学習構築のための検討委員会」の助言を参考にして、１年間かけて作成に取り組んだ。

新しい学習資料の構成は、（１）奈良には本当にいいものがある、（２）古都奈良の文化財について、（３）学習モデルの３部構成になっている。以下、その概要について述べる。

（1）奈良には本当にいいものがある

第１回検討委員会において、前回の学習資料には「熱意」が感じられないとの指摘を受けた。そこで「熱意」とは何かを検討し、「必ず子ども達に伝えたくなるような、本当の奈良のよさ」であると結論づけた。

古都奈良の文化財は、1300年の時を経たものが多くある。そしてそれらは、偶然1300年間もの長い間残ってきたものではなく、なくなっても当たり前であるものが、大切に受け継がれてきた結果、今、そこに「ある」のである。目の前の文化財には、守り伝えてきた人々の願いや伝統の技が凝縮されていると言っても過言ではない。また、シルクロード文化の影響を色濃く残すものも多い。正倉院御物のように、それらの遺産の発祥の地である中央アジアや中国、朝鮮半島等では失われてしまったもの、発掘調査によって地中からしか発見できないものが、正倉院には当時のままの姿で保存され、受け継がれているのである。

奈良で育つ子ども達、いや大人でさえ、奈良の文化財や自然景観を所与のものとして受け止めており、「あって当たり前」としか感じていない。いわば空気のような存在であり、その貴重さに気付いていない。目の前にあっても、「見えていない」のが実情である。それは、寺院や神社などの仏教建造物や仏像などの仏教美術は、大人にとってもわかりにくいものが多く、現代の子どもには容易には理解しにくい側面もある。

そこで、「見てはいるが、実は見えていない」という漫然とした心情に楔を打ち込み、見つめ直す態度への変換を意図し、まず古都奈良の象徴である「東大寺の大仏」の建立と復興に関する、聖武天皇や重源上人、公慶上人の業績に焦点を当て、大仏に込められた願いに気がつくことができる読み物資料を作成した。

続いて東西文化交流への視点移動も意識しつつ、正しい仏教を日本に伝えるために、命をかけて渡日してきた「唐僧鑑真」を紹介した。さらに、シルクロード文化圏の中の奈良という、より広い視点から古都奈良の文化財を意識することを意図した「シルクロードの終着点正倉院」という項目を設けた。そして最後に環境教育へと学習の広がりを考慮し、古都奈良の自然景観として定着している奈良公園の鹿に焦点をあてた「奈良の鹿と人のかかわり」の項目も設けた。

以下、「東大寺の大仏」を紹介する。

【聖武天皇】

７４３年聖武天皇が盧舎那仏造顕の詔を発せられます。その中に、次の言葉が見られます。「動植咸く栄えんことを欲す。」

聖武天皇は、人間だけではなく、動物や植物までもがともに栄えることを願っていたのです。（中略）そして、「如し更に、人の、一枝の草、一把の土を持て、像を助け造らんことを請願するものあらば、恣に之を聴せ。」

聖武天皇は、その呼びかけに対して一緒に造りたい、手伝いたいという人々の、小さな力と思いを集めて、大仏さまをつくろうとしたのです。（中略）

【重源上人】

鎌倉時代、焼け落ちた大仏さまの復興を任されたれたのは、重源上人でした。（中略）「尺布寸鉄、一木半銭」

尺布寸鉄とは布きれや金くぎです。一木半銭とは、木ぎれやわずかなお金です。みんなの小さな力を集めて大仏さまを造ろうとしたのです。（中略）

戦国時代の末に焼け落ちた大仏さまを復興したのが公慶上人でした。公慶上人も重源上人と同じく、小さな寄付を求めて全国をまわりました。

【公慶上人】

公慶上人は、「一針、一草の喜捨」をとなえ、寄付を集めました。（中略）

大仏さまをよく見てみましょう。色の違いに気がつくことでしょう。大仏さまの足もとやはす蓮の花（台座）のあたりは奈良時代のものです。腰のあたりは鎌倉時代に重源上人が復興したものです。そして体は戦国時代、顔は江戸時代に公慶上人が復興したものです。大仏さまにはたくさんの人々の思いが込められているのです。（中略）小さな力で大きな大仏さまを造るには、小さな力がたくさん必要です。できるだけたくさんの人々が大仏さまと縁を結び幸せになってほしい、動植ことごとく幸せな世の中にしたいという思いがあったと考えられます。

東大寺の本尊である盧舎那仏は「奈良の大仏さま」として全国的に有名である。けれども、そこに込められた願いはほとんど知られていない。「動植ことごとく栄える世の中に」そして「小さな思いと力を集めて、実現不可能と思われることをやり遂げた」という２つを、奈良の子ども達に必ず伝えたいメッセージであると位置づけた。また次の（２）古都奈良の文化財においても、単なるガイドブックとは一線を画し、子ども達に伝えたい奈

良のよさを吟味しつつ、文化財の紹介を行った。

（２）古都奈良の文化財

世界文化遺産「古都奈良の文化財」を紹介するにあたって、次の２つの視点から文化財の紹介を行った。第1は、前述した子ども達に必ず伝えたいメッセージの視点であり、第２は国際理解教育の視点である。

第１のメッセージの記載例として、唐招提寺の釈迦如来立像にまつわる事実を紹介したい。

ノミもシラミも仏に

【釈迦如来像】

唐招提寺の釈迦如来像の像内に文書が納められています。

「必ず必ず、これらの衆生より始めて、一切衆生、皆々仏となさせ給え」と書かれており、その左に多数の名前が並んでいますが、人の名前に交じり、クモ、ノミ、シラミ、ムカデ、ミミズ、カエル、トンボ、カなどの名前も書かれています。皆がいやがるノミやシラミ、ムカデも仏に…その意味するところを考えてみてください。

唐招提寺の釈迦如来立像は、鎌倉時代の作であるが、その像内に納められていた文書から、この像の制作に関わった人々が、人間だけでなく「動植ことごとく」幸せな世の中にしたいと願っていたことがわかる。動植ことごとく幸せな世の中の構築が、ＥＳＤの視点であることは明らかである。

第２の国際理解教育の視点からの教材例として、興福寺の阿修羅像を紹介したい。

阿修羅像に見る文化交流

【阿修羅像】

阿修羅は、ペルシアのゾロアスター教では、大地にめぐみを与える太陽の神、最高神としてあがめられていました。しかしインドに伝わると、バラモン教（後のヒンドゥー教）においては、熱さを招き、大地を干上がらせる太陽神として、常にインドラ（帝釈天）と戦う悪の戦闘神とされるようになりました。さらに、仏教に取り入れられると、釈迦の教えにふれて仏教の守護神となりました。

同じものでも受け入れる側の文化によって、意味が変わっていくことを教えられます。

古都奈良の文化財は、８世紀のシルクロード文化の影響を強く受けており、ペルシャやインド、中国や朝鮮半島の文化が融合して生まれたものであることを意識する必要がある。この視点が欠如すれば、世界遺産学習は単なる自文化中心主義の「お国自慢」に陥ってしまうであろう。

自国の文化を尊重するとともに、他国の文化に対する関心を高め、尊重する態度を養うことが重要である。

さらに、第３部には、これまで歴史学習のひとつと見なされてきた世界遺産学習に対する見方を変換するために学習モデルを記載した。

（３）学習モデル

学習モデルを記載する上で、配慮したことは、次の３点である。第１が生涯学習の視点。第２が多様なモデルの提示。第３が総体的な学習の促進である。

第１の生涯学習の視点であるが、それはＥＳＤの実践の場を学校教育の枠に閉じ込めないということである。歴史のある奈良では、毎日のように考古学の発掘成果や文化財に関する記事が新聞紙上に登場する。古墳の説明会などでは､数百人の方々が現地説明会に参加している。筆者も県教育委員会主催の「平城京フォーラム」に参加したが、定員700人の会場が満席であり、参加者のほとんどは高齢の方々であった。世界遺産に対する関心は、年齢を問わず高いものがある｡学校での学びだけでなく、夏休みの自由研究や、家族と一緒に世界遺産学習に取り組んでみようということも考えられる。さらに、ＥＳＤは学齢期の子どもだけでなく、全ての世代において学習していくことが求められる。そこで、学習モデルの記載においては、学校教育外の学習の機会にも利用できることを念頭において編集した。

第２の多様な学習モデルの提示についてであるが、世界遺産の保護や危機遺産から現代的な諸問題を考えるモデルが２つ、国際理解教育の視点に立つモデルが１つ、世界遺産を切り口に地域のよさを再認識し、地域の持続的発展について考えるモデルが３つ、環境教育の視点に立つモデルが３つ、歴史教育の発展から持続可能な社会のあり方を考えるモデルが１つ、合計10の学習モデルを記載し、学校の地域性や子どもの実態に即して選択的に利用できるように配慮した。また別冊ではあるが、それぞれの学習モデルの指導資料を用意し、教職員の研修資料としても活用できるように配慮した。

第３に総体的な学びの促進である｡学習には学習内容、学習方法、学習成果の３つの相がある。世界遺産学習では、学ぶ価値のある学習内容を五感を通して、また友達や先生との協同によるやりがいのある学習方法で学び、効力感に裏付けられた学習意欲や複眼的な見方・考え方、情報収集や情報活用等の学ぶスキル、学習に即した知識等の学習成果を獲得する総体的な学習を目指してい

る。学習モデルにおいては、クイズのような一つの正解を求めるのではなく、学習を通して、一人ひとりの子どもが多様な感じ方、考え方を経験し、さらにそれを学級やグループでの話し合い活動を通して交流することで、広げていくことができるようなオープンエンドな学習を提示することとした。

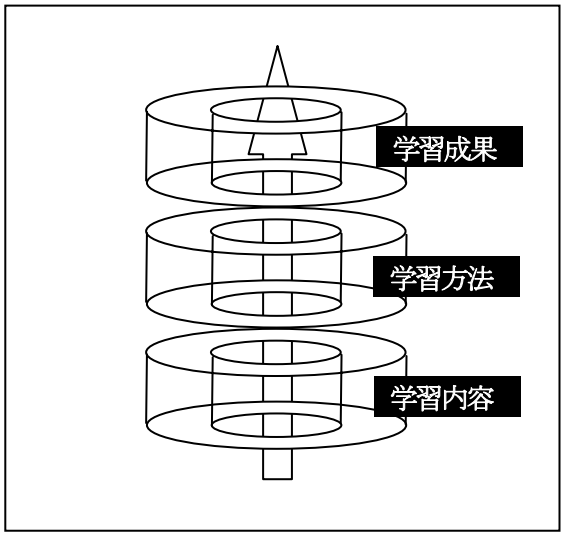

図3　総体的な学習イメージ図

以下にそのひとつ、「江戸時代の奈良観光」を例示する。この学習は、宝暦８年（1758年）に書かれ、弘化５年（1848年）に筆写された『奈良名所子供案内』という案内記と同じ頃に作成された絵地図に『ならめい志ょえづ』をもとに、江戸時代の旅人が奈良観光に訪れた名所を探して歩くという、中学校１年生を学習者として想定し、開発した学習モデルである。

江戸時代の奈良の観光名所が、春日大社や東大寺、興福寺の境内地であったこともあり、比較的多くの名所を現在も見ることができる。それが奈良の特色のひとつであろう。

それらは偶然に残ったのではなく、意図的に保存、継承されてきたものである。そこに人々の努力や願い、また保存技術があったことを考えさせ、変わらない奈良のよさに気づかせることが学習のねらいである。

一方、轟橋や雲井阪のように、江戸時代には「南都八景」とされながらも、現在残っていないものもある。なぜ残らなかったのか、その理由を考えることは、古都奈良の文化財に代表される文化財や自然景観の保護、継承を考える契機になる。

さらに、自分たちの地域における残したい文化財や自然景観を選ぶことで、地域を見直し、そのよさを感じ、地域の持続的発展について考える態度を養うことが可能である。それが、本学習モデルの目標である。

3．2．啓発用リーフレットの作成

ＥＳＤに発展する世界遺産学習を推進するためには、教職員が趣旨を理解し、意欲的になることが肝要である。そこで、上述した世界遺産学習の意義や目標を示すと共に、「必ず奈良の子どもたちに伝えたいこと」として、東大寺大仏の復興の記事から「小さな力と思いを集め、実現不可能と思われることを成し遂げてきた奈良」、及び唐招提寺釈迦如来像の記事から「人間だけでなく、全ての生き物の幸せを願う奈良」を示した啓発用リーフレットを作成した。

また、小学校高学年から中学校にかけての系統的な学習を行うことができるように、下図のような世界遺産学習カリキュラム例を提示した。

表2　世界遺産学習カリキュラム例

	５年	６年	中１	中２	中３
地域再発見	ピンホールカメラやフォトストーリーで奈良を紹介。	地域の南都八景を選ぼう	江戸時代の奈良観光を体験		
環境	鹿落語から奈良の鹿へ	佐保川源流探検	大仏ホタルと川の汚れ	奈良公園の巨樹	奈良公園の植生
国際理解	外国人観光客へインタビュー		正倉院御物のルーツ	Best souvenir in Nara	Show & Tell Nara
平和		原爆ドームと大仏			沖縄戦
人権			北山十八間戸	大乗院庭園	負の世界遺産
他教科	千年の釘（国）	平和の砦（国） 狂言（国）	雅楽（音） シルクロードの音楽（音）	五重塔（国）	能（音） 観光ポスター（芸）

このカリキュラム例は、世界遺産学習のスタートラインにおける例であり、今後の実践の積み重ねから、より内容の充実したカリキュラムを作成していきたいと考えている。また、学校の立地条件によって、実践が可能なものとそうでないものがある。そのために、カリキュラム作成に柔軟性を持たせている。

上述したように学習資料とそれに即した指導資料、及び教職員対象のリーフレットによる、ＥＳＤに発展する世界遺産学習の啓発を行うと共に、教職員研修において、世界遺産学習の意義や目的、学習方法等の周知に努めていきたい。

さらに、先進的で優れた実践を目の当たりにすることで、教職員の世界遺産学習の実践意欲を高めることが必要である。そこで、優れた実践を報告・交流し、その中からより洗練された学習方法や明快な学習理論、学校の立地条件を生かした実践のアイデアなどの抽出を目的

に、世界遺産学習実践研究会を開催した。

4．世界遺産学習実践研究会について

4．1．実践研究会の概要

検討委員会を組織する奈良市教育委員会、奈良教育大学、奈良国立博物館と、ＥＳＤを研究・推進している日本国際理解教育学会の共催で、2008年２月23日に奈良教育大学を会場として開催し、212名の参加者を得ることができた。

世界遺産学習の方向性は、前述したように、世界遺産からＥＳＤへというものであるが、奈良の教職員の間では、比較的新しい概念であるＥＳＤについての認知度は高いとは言えない。そこで、文部科学省ユネスコ協力官である秋山和男氏による、ＥＳＤの概念、及び世界遺産学習とＥＳＤの関わりについての講演を通して理解を深めた。また、財団法人日本ユネスコ協会の教育文化事業部長寺尾明人氏からも、世界遺産から地域学習への展開によるＥＳＤについての知見を得た。さらに、参加者の大部分を占める奈良市立学校教職員に子どもに伝えたくなる奈良の本当のよさを伝えるために、検討委員である西山による講演を企画した。

その後３つの分科会に分かれての実践交流会を行い、小学校５校、中学校２校、高等学校２校の実践報告をもとに、世界遺産学習についての協議を深めた。

【第１分科会】
・『世界遺産のあるまち奈良』の「もの・こと・人」から
　　奈良市立済美小学校　教諭　大西浩明
・キャリア教育の視点から見た世界遺産学習
　　奈良市立田原小中学校　教諭　榎本克之
・私たちの世界遺産や校区を発信しよう
　　奈良市立椿井小学校　教諭　小島源一郎
【第２分科会】
・世界遺産から平和を考えよう
　　奈良市立平城西小学校　教諭　中澤敦子
・世界遺産学習から地域を愛する心を育む
　　奈良市立鼓阪小学校　教諭　西田妙子
・江戸時代の旅から奈良を再発見
　　奈良市立三笠中学校　教諭　深澤吉隆
【第３分科会】
・世界遺産教育とＥＳＤの関わりについて
　　奈良県立法隆寺国際高等学校　教諭　祐岡武志
・ユネスコ青年交流2006・2007
　　奈良市立一条高等学校　教諭　藤村智子
・「世界遺産を通しての教育」への試み
　　奈良教育大学附属中学校　教諭　谷口尚之

市立学校教職員だけでなく、日本国際理解教育学会の研究者、将来教員になろうとしている奈良教育大学の大学生・大学院生、ＮＰＯなど世界遺産にかかわる人たち、また他県からの教職員など、多様な人々が実践をもとに討議し、次のような成果を得ることができた。

（１）第１分科会

第１分科会で報告された３つの実践に共通しているものが２点ある。第1が自己の体験にもとづいて収集したデータを用いた学習活動を展開していることであり、第２に発表・発信を学習過程に位置づけていることである。

第１の自己の体験にもとづいて収集したデータを用いた学習活動であるが、済美小の実践では、観光客を対象とした「残したい景観」アンケートを実施している。そのアンケート結果をもとに、なぜ残したくなるのかを明らかにしながら現在の「南都八景」を選定している。さらに、自分たちの地域における「八景」を選ぶことから、地域を再発見し、地域を愛する子どもの育成に取り組んでいる。

田原小中学校の実践では、小中一貫教育校ならではの特色である英会話科の学習と連携し、外国人観光客に奈良のよさについてインタビュー活動を行い、他文化を背景とする人々の目を通した奈良を再発見する内実が報告された。

世界遺産の興福寺を校区にもつ椿井小学校の実践では、デジタルカメラを用いて、観光客には見つけにくい奈良のよさの画像を収集し、パソコンソフト「フォトストーリー３」を用いたデジタル作品作りに取り組んでいた。

（２）第２分科会

第２分科会では、各学校でこれまでに取り組んできた実践を、世界遺産学習の視点から見直すことが提案された。

平城西小学校の実践は、修学旅行の取組と世界遺産学習、さらに国語科の学習を連携させた取組であった。奈良市ではほとんどの小学校が、平和教育の一環として、修学旅行で広島を訪れており、原爆ドームを含む広島平和記念公園での現地学習のほか、事前・事後学習にも取り組んでいる。ここに、国語科の「平和の砦を築く」の学習を取り入れることで原爆ドームの保存運動と、原爆ドームに込められた願いを学習した。また平行して東大寺の大仏の建立や復興に込められた願いを学習し、その共通点を見つけることで、平和への願いが、時間を越えた普遍的で、最も大切なものであることの理解ができていた。

東大寺を校区に含む鼓阪小学校の実践では、総合的な学習における校区のよさを見直す学習において、奈良市写真美術館の協力を得ながら、ピンホールカメラを用い

た撮影会を行った。ピンホールカメラは、印画紙に直接画像を焼き付ける手作りカメラであり、１度の撮影会に１枚しか撮影することができない。この制約が、逆に子どもの見る目を鍛えるのである。東大寺の大仏の復興や二月堂の修二会について学び、改めて東大寺の価値に気付いた子ども達は、みんなに見てもらいたい東大寺の魅力を撮影しようと、ピンホールカメラを手に出かけるが、なかなか撮影することができない。一枚しか撮影できないからこそ、本気になったのである。ピンホールカメラという「しかけ」を用いることで、地域を見直す目を養うことができていた。

【撮影した朱雀門】

三笠中学校の実践は、校外学習として行われている奈良公園等でのグループ単位のオリエンテーリングを、江戸時代にタイムスリップしようと、江戸時代の地図を片手に観光名所を見つけていく学習である。概要は、学習資料のところで述べた通りである。

（３）第３分科会

第３分科会では、世界遺産の保護と自己の生活との関連に気付かせる取組が報告された。

法隆寺国際高校の実践では、「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されたことを機に、観光開発が進み、遺産の保護が困難になっている現状を取り上げ、観光開発と世界遺産保護について考える学習であった[3]。法隆寺国際高校の位置する斑鳩町には、日本で最初に世界遺産に登録された法隆寺があるが、斑鳩町を訪れる観光客は減少傾向である。地域の活性化のためには観光客を増やしたい。一方、世界遺産は保護し、継承していくべきものである。また将来、海外の世界遺産を旅行してみたいと思う生徒もたくさんいる。自己の欲求と世界遺産保護のジレンマが、学びを深めることとなった。

奈良教育大学附属中学校の実践は、世界の危機遺産を取り上げ、その要因に、日本人の消費行動と結びついているものもあることを指摘し、自己の生活を見つめさせる実践であった。コートジボワールのコモエ国立公園は、動物相と植物相の多様性から世界自然遺産に登録されているが、象牙を目的とした象の密猟が絶えず、危機遺産となっている。そして、密猟された象牙を輸入しているのが、日本や中国など、印鑑を使用する国々なのである。他にも都市開発や戦争、環境悪化等により、30の世界遺産が危機遺産になっている。そして危機遺産を招くひとつの要因が無関心であることを、提示したのが、一条高校の実践であった。

一条高校では、ＡＣＣＵ（アジア・ユネスコ文化センター）の事業の一つであるユネスコ青年交流を受け入れ、英語科の３年生と人文科の１年生との交流を行なっている。今回は、一条高校の近くにある世界遺産平城宮跡を案内する取組であったが、案内するためには事前に調べ学習が必要となり、初めて平城宮跡を訪れたという生徒も多かった。また他文化を背景とする研修生に、平城宮跡に関する質問を受けることで、今までの無関心に気付かされた生徒も多かった。

平城宮跡は、バイパスのための地下トンネル建設を認めるかどうかで近年問題になったばかりである。無関心であることが、便利さや収益と引き換えに、世界遺産を危機遺産にしてしまうこともある。そのような経緯を対象化した実践報告であった。

４．２．実践研究会の教育学的考察

実践研究会での協議において、世界遺産学習の特徴を明らかにすることができた。第1は現地学習（フィールドワーク）の重要性である。第２は発表・発信型の学習の意義である。また、今後の世界遺産学習の充実・発展のための一つの方向性が明らかになった。

（１）世界遺産学習における現地学習の重要性

世界遺産学習では、現地見学を重要視している。それは、自分たちが苦労して収集した、一見何のまとまりもないデータを学級に持ち寄り、共通点や相違点を見つける学習を行う過程で、データの整理が行われ、意味のあるものになっていく。そのプロセスを通して、子どもは学習に対する効力感を得ると同時に、学ぶ楽しさを感じることができるのである。

この多様な事象から規則性を見出す欲求について、児童心理学者である波多野誼余夫・稲垣佳世子は、その教育学上での筋道を「「人間は、自分及び自分を取り巻く世界について整合的に理解したいという基本的な欲求を持つ存在である。環境内に規則性を見出そうとしたり、新しく得た情報を既有知識に照らして解釈したりしようとする。また、そうした規則をさらに別の場面でも積極的に使ったり、解釈から引き出された予測を確かめることによってその妥当性を検証しようとするのである[4]」と指摘している。

自分の住む奈良を教材としていることも子どもの学習意欲の向上に効果的ではあるが、それ以上に、友達と協力して収集したデータが、学級全員にとって重要な学習素材として活用されることで、学習における当事者意識が生まれ、学習意欲が向上するのである。

特に済美小学校の実践においては、観光客へのアンケート結果から明らかにできたものを、今度は自分たちの校区にあてはめて考える学習を通して、子どもたちは学ぶ意義をつかむことができたはずである。まさに、佐伯胖が「構造的意義化」と呼ぶ「具体的な状況の中での固

有の知識を全く異なる状況での別の世界での知識に『読みかえる』ことによって、その新しい世界での事物に関する新しい知識を得る[5]」学習が成立していたのである。

今後の世界遺産学習において、古都奈良の文化財の調べ学習から、あるいはインタビュー調査から得た知識や規則性を、地域にあてはめ、地域のよさを発見したり、地域の社会生活の持続性を考えたりする学習は、ひとつの重要な方向性となっていくであろう。

（２）発表・発信型学習

世界遺産学習の特徴として、発表・発信型の学習を挙げることができる。済美小学校の実践においては、学習成果を保護者や全校児童に対して発表する学習過程が組み込まれていた。田原小中学校の実践においては、奈良のよさをテーマとしたプレゼンテーションを作成し、他学年に対する発表会を行った。また、椿井小学校の実践においては、「フォトストーリー３」を用いて作成したデジタル作品を交流している学校に発信した。

学習過程に発表・発信を位置づけることで、２つの意味で子どもの学習を深めることができる。第1は事前準備において、他者を想定した学習を意識することである。第２は発表・発信における応答を通しての学びの深化である。

第1の発表準備段階であるが、発表という場面を設定することで、子どもは伝えたい内容を、相手に伝わりやすく整理することになる。この内容の整理が自己の学びを振り返る契機となり、理解を深めることができるのである。他者を想定することによる子どもの思考の深まりついて、発達心理学者である佐藤公治は、ロシアの児童心理学者ヴィゴツキーを引用し、「始めは社会的な活動を展開するための道具であった言葉が、個人の思考活動を支える道具となっていく[6]」と述べている。つまり、他者を想定し、他者に伝えるという目的をもって表現方法や適切な言葉を選択するというプロセスが、今まで気付かなかったことに気付いたり、混沌としていた思考を整理し、体系づけたりし、より深い思考が行われる契機となるのである。

第２の発表における応答についてであるが、発表を聞いた子どもは、わからないところや疑問に思ったことを質問する。発表者は質問に答えなければならない。前掲の波多野・稲垣が「相手がなかなか分かってくれないので、説明の仕方を色々変えているうちに、自分でも前よりもよく分かるようになったと思えたり、相手に説明しているうち、自分の理解が不十分であることに気づき、知的好奇心をさらにかきたてられる、といったことも起こりやすい[7]」と指摘するように、応答そのものが、思考の深まりを促進するのである。

また、自分より上の学年の児童生徒に対して、世界遺産学習での学びを発表し、批判されたり、助言されたり、賞賛されたりすることで、子どもはそれまで以上の学習方法を獲得することになる。この自分よりも少し能力がある他者との協同による学習の深まりについて、教科学習の活動理論からの捉えなおしを提唱する山住は、前掲のヴィゴツキーの最近接発達領域の理論を紹介しつつ次のように述べている。「『現下の発達水準』はすでに習得され日常化した活動の範囲を表している。その意味で、個人の自立的な活動遂行の範囲でもある。そして『最近接発達領域』は、そのようにすでに習得され日常化した活動形式を新たに乗り越え、活動課題を解決する様式と手段を反省的に探索・構築することによって創出される[8]」自分よりも少し進んだ者との協同的な学習が、子どもの最近接発達領域を刺激し、思考の発達を促すのである。

さらに、発表・発信する側と受け止める側の児童生徒双方の思考の深まりも期待できる。このことについて、前掲の波多野・稲垣は「子ども同士のやりとりの方が、大人と子どものやり取りに比べ、自分の持っている知識を相互に関連付け、まとまりのとれたものにしていきやすい、言い換えれば理解を促しやすいのではないか[9]」と指摘し、その理由として「大人から与えられる情報と違って、仲間からの情報は権威がないため、無批判に正しいものとして受け入れられることが少ない。このような事態では、正答を見つけるべく、自分の持っている知識を関連付けてまとまりのとれたものにしようとすることがより活発に行われやすい。その結果、対象になっている事象についての理解がより深まっていく[10]」と述べている。

世界遺産学習では、同じ学習課題について学習してはいるが、学習者の生活背景や経験、ものの見方や考え方は多様である。前掲の波多野・稲垣が「他者は通常経験や関心を異にするから、当然問題を見る視点も異なる。このため、他者からの質問や批判を通じて、自分の気づかなかった制約条件に気づき、理解が深まることがある[11]」と指摘するように、多様な背景をもつ子どもからの質問を受けることで、発表者は今まで当たり前であると思っていたことがそうではないことを教えられたり、事象を他の角度から見つめ直したりすることとなり、結果として理解が深まるのである。

前掲の佐伯が「日常的な当たり前のことを互いにしっかりと実感をもって確かめ合うことが、物事を考え、理解することのための大前提である[12]」と指摘するように、発表・発信を学習過程に位置づけることは、子どもの思考や理解を深める上で重要である。今後も世界遺産学習において、このような発表・発信型の学習を想定した取組を強化したい。

第1分科会においては、発信の手段として、ユネスコ・スクールへの加盟によるネットワークを用いた発信

についても示唆を得た。奈良市教育委員会では、この提案を受け、2008年度４月に市立学校にユネスコ・スクール加盟について検討することを提案したところ、現在５つの小学校と４つの中学校が加盟の意思表示をしている。

（３）世界遺産学習の充実・発展

世界遺産学習の充実・発展のための一つの方向性とは、既存の取組みを世界遺産学習の視点から組みなおし、ＥＳＤに発展する学習を志向する、発想の転換である。平城西小学校の実践報告は、既存の平和教育と世界遺産学習を連携したものである。2007年度の市立小学校の修学旅行の行き先は、48校中47校が広島であり、そこでは、当然平和教育が取り組まれている。つまり、平城西小学校の実践は、47校において、既存の取組をＥＳＤの視点から見直すことで可能である。ＥＳＤは何か新しい取組を始めなければならないものではなく、既存の取組を見直すことで、ＥＳＤに発展し、学習成果も期待できることを示している。

同じように市立中学校の修学旅行の行き先は、21校中16校が沖縄で、２校が長崎である。沖縄では「ひめゆりの塔」や「平和の礎」を訪れる学校も多いであろう。長崎では「長崎原爆資料館」を見学するであろう。「ひめゆりの塔」やガマを保存しようとする人々の思い、「長崎原爆資料館」を支える人々の思いと大仏復興の思いを重ねあわすことで、平和への願いが地域や時代を越える普遍的な願いであることが理解される。それとともに、現在も内戦やテロ等が発生している国や地域があることや、核兵器を開発したり保有したりする国がたくさんあることを学ぶことで、平和な世界を築くことの難しさや、国際理解の大切さ、個々人の役割等も考えさせることができる。今後も、世界遺産からＥＳＤに発展する学習を奈良の特色ある学習活動として、全ての小中学校での実践へと広げていくために、既存の取組の見直しを進めていきたい。

以上のように、分科会における実践を通した協議から、世界遺産学習の進め方として、「足で稼ぐ」体験・参加型学習と発信型学習の重要性が明らかになった。また、各学校で行われている従来の取組に、世界遺産学習の視点を取り入れ、再構築を図ることで、ＥＳＤに発展する学習活動へと転換できることを指摘した。一方、世界遺産の保護・継承に対する当事者意識をどのように育成していくかということ[13]が課題として確認された。

6. おわりに

世界遺産教育は、世界遺産等の文化財を切り口として、国際理解教育や環境教育、人権教育や平和教育、歴史教育へと発展できる学習である。

世界遺産は、保護し次世代に受け継がなくてはならない人類の宝物である。しかし、異文化・他民族に対する無理解・不寛容が貴重な文化財を破壊する行為に発展したり、戦争を引き起こしたりし、結果的に文化財破壊につながっている。また、環境の悪化が自然遺産にダメージを与えたり、文化遺産を浸食したりする。ユネスコ憲章前文にあるような「心の中に平和の砦を築くため」の一つの方法が、世界遺産学習である。文化財を切り口とした過去との対話によって、長い時間の流れの中で自己の在り方や現在の生活を捉え直したり、自文化の理解が深まったりするだけでなく、他国の歴史や文化に対する関心を高めたり尊重する態度を育成することもできる。

世界遺産学習実践研究会は、2008年度も奈良教育大学を会場として開催することを予定しており、平城遷都1300年にあたる2010年度には、「世界遺産学習サミット」の開催も視野に入れている。

今後も、学校現場の先生方とともに、奈良だけでなく、全国各地で行われている文化財を活用した実践や国際理解教育、また環境教育や平和教育、人権教育などのＥＳＤ実践校、またユネスコ・スクールとも連携し、多様な実践の交流を図り、実践のフィルターを通した実証的な研究を深めて、世界遺産教育の学習モデルを析出したいと考えている。

注

（１）奈良市教育委員会（2000）『世界遺産のあるまち奈良』
（２）田渕五十生・中澤静男（2007）「ＥＳＤを視野に入れた世界遺産教育」『奈良教育大学実践総合センター研究紀要』第16号pp.60－61
（３）田渕五十生・谷口尚之・祐岡武志（2008）「世界遺産教育の教材化の視点と実践報告」『奈良教育大学教育実践センター研究紀要』pp.294－296
（４）波多野誼余夫・稲垣佳世子(1989)『人はいかに学ぶか』中公新書p.47
（５）佐伯胖(1990)『考えることの教育』国土社p.178
（６）佐藤公治（1999）「人との関わりの中で学習と発達を考える」『43人が語る「心理学と社会」第2巻発達・学習・教育』ブレーン出版p.49
（７）波多野誼余夫・稲垣佳世子（前掲書）p.132
（８）山住勝広（1998）『教科学習の社会文化的構成』勁草書房p.105
（９）波多野誼余夫・稲垣佳世子(1984)『知力と学力』岩波新書p.105
(10) 波多野誼余夫・稲垣佳世子（前掲書）p.106
(11) 波多野誼余夫・稲垣佳世子　前掲『人はいかに学ぶか』p.128
(12) 佐伯（前掲書）p.187
(13) このことについて、前掲の田渕五十生・谷口尚之・祐岡武志（2008）「世界遺産教育の教材化の視点と実践報告」を参照されたい。